

くろ さき たね だ
富山市黒崎種田遺跡
発掘調査報告書

—駐車場建設及び工場増築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

2005

富山市教育委員会

富山市埋蔵文化財発掘調査報告書 2

富山市黒崎種田遺跡発掘調査報告書 正誤表

頁	行	誤	正	
5	27行目	2cm	2m	訂正
5	34行目	8世紀	6世紀	訂正
9	1行目	青白緑灰色	明緑灰色	訂正
12	遺構觀察表 79行目	土師器塊 塗墨器 中量土器器 陶器 脱粒 9 C末～10C	土師器塊・塗・中量土器器 陶器 脱粒 6 C	訂正
12	遺構觀察表 80行目	土師器塊・塗・瓦器・白器 9 C末～10 C	瓦器・白器 中量土器器 陶器 12～13 C	訂正
13	土器・陶磁器觀察表 38行目	釉：青白緑灰色	釉：明緑灰色	訂正
36	要約1行目	微高地地上	微高地	訂正
27	3行目	『大境11号』	『大境11号』 富山考古学会	追加
27	16行目	『富山史蹟』	『富山史蹟』第127号 越中史蹟会	追加
27	44行目	北陸中世土器研	北陸中世土器研究会	追加

くろ さき たね だ
富山市黒崎種田遺跡
発掘調査報告書

-駐車場建設及び工場増築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告-

2005

富山市教育委員会

例　　言

1. 本書は、富山市黒崎地内に所在する黒崎種田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、株式会社富山フォーム印刷が施行する駐車場建設及び工場増築工事に伴い、同社の依頼を受けて富山市教育委員会埋蔵文化財センターの監理のもと株式会社中部日本鉱業研究所が実施した。
3. 調査は、駐車場建設にかかる670m²を平成16年度、工場増築にかかる105m²を平成17年度に実施した。
3. 調査期間・面積

平成16年度

現地調査 平成17年1月27日～平成17年3月18日 調査面積 670m²

出土品整理 平成17年3月18日～平成17年11月20日

平成17年度

現地調査 平成17年6月14日～平成17年6月24日 調査面積 105m²

出土品整理 平成17年6月27日～平成17年11月20日

4. 担当者 平成16年度：株式会社中部日本鉱業研究所 埋蔵文化財調査室 調査員 高野裕二
平成17年度：株式会社中部日本鉱業研究所 文化財調査課 主任調査員 新宅輝久

5. 調査にあたり、次の方々のご指導・助言・協力を得到了。記して謝意を表します。（五十音別）
岡本淳一郎 金三津道子 菅田薰 武田健次郎 中村亮仁

6. 出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会が保管している。

7. 本書の執筆は、第Ⅱ章調査に至る経緯を富山市埋蔵文化財センター中本八穂が行い、その他を高野、新宅が分担して行った。各々の責は文末に記した。

凡　　例

1. 方位は真北、水平基準は海拔高である。
2. 座標は公共座標（世界測地系）を使用した。
3. 掘図中に示す遺構表記の略号は次の記号を用いた。
S B：掘立柱建物 S D：溝 S E：井戸 S I：竪穴建物 S K：土坑 P：穴
4. 土色・土器胎土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色粘』に準拠した。
5. 遺構観察表内での遺構番号の飛び番号は欠番を示す。
6. 測量・および遺物実測図内の細部指示は以下の通りである。
：遺構検出面 : 遺物実測図中の煤付着
7. 測量・遺構実測図の縮尺は原則として1/40を基本とし、遺物は1/3、1/4とした。それ以外はその都度縮尺率を記した。
8. 遺物残存率は実測図中に示した部位の完形遺物に対しての比率である。
9. 本報告で使う須恵器、十郎器の器種名は、須恵器で無高台壺は壺A、有高台壺は壺Bとし、上師器は、須恵器の系譜を引く無高台のものを壺A、平底無高台の皿を皿Aとした。

目 次

I 遺跡の位置と環境	1
II 調査の経緯	2
III 調査の概要	
i) 平成16年度調査	
1. 調査概要	
(1)調査の方法	3
(2)基本層序	3
2. 遺構	5
3. 遺物	7
ii) 平成17年度調査	
1. 調査概要	
(1)調査の方法	14
(2)基本層序	14
2. 遺構	14
3. 遺物	19
IV 自然科学分析	23
V 総括	26
写真図版	28
報告書抄録	36

図版目次

第1図 黒崎種田遺跡と周辺の遺跡	1	第8図 遺構内及び遺構外出土遺物	11
第2図 調査位置図	2	第9図 平成17年度 調査区全体図	15
第3図 基本層序図	3	第10図 SD 1・2・5・6 土層断面図	16
第4図 平成16年度 調査区全体図	4	第11図 SI 1 遺構平面図・断面図	18
第5図 壁穴状造構(S K83)平・断面図	6	第12図 遺構内出土遺物	20
第6図 SD68・SB99・SE69平・断面図	8	第13図 遺構内出土遺物	21
第7図 遺構内出土遺物	10		

表目次

表1 平成16年度調査遺構観察表	12	表4 平成17年度調査土器観察表	22
表2 平成16年度調査土器観察表	13	表5 平成17年度調査木製品観察表	22
表3 平成16年度調査土製品・金属製品・木製品観察表	13	表6 平成17年度調査遺構観察表	22

I 遺跡の位置と環境

黒崎種田遺跡は、富山市街より南へ約6kmの富山市黒崎地内に位置する。本遺跡は、大きくは熊野川と常願寺川に挟まれた扇状地であり、小さくは熊野川と土川に挟まれた微高地に位置している。周辺の標高は20m前後を測る。周辺には中小の河川や用水が流れ、それらの流路に形成された段丘上には多くの遺跡が分布している。

周辺には縄文時代から古墳時代・奈良・平安時代・中世など長期にわたって遺跡が形成されている。本遺跡の西側に近接して八日市遺跡、南側には鶴川館跡があるほか、熊野川の西側では任海宮田遺跡、友松遺跡など集落を伴った多くの遺跡がみられる。また、県総合運動公園建設に伴う発掘調査の結果から、古代から中世にかけての大規模な集落跡を検出しており、周辺一体に莊園が形成されていた状況が窺える。熊野川の東側では、上野城や布市城などの城跡や、寺跡、豪族の館跡など、中世に起源を求める遺跡が多く分布する。上野城跡では土壘や堀の一部も確認されている。本遺跡の南には中世の豪族である越川氏の城館「越川館跡」が立地しており、同地内にはその菩提寺とされる曹洞宗・最勝寺が現存する。地名にも越川の名が残っている。また、本遺跡西方の上新保遺跡では中世の集落が確認されており、近接する布市地区には、康永3(1344年)に越中守護となつた桃井直常が観応の乱で足利方に敗れた後に余生を過ごしたという伝承が残されている。上新保遺跡内に在住する桃井家はその末裔とされる。土川の上流付近には江本経塚や西森経塚など中世から近世にかけての塚・経塚も多く存在している。

(高野)



- | | | | | | |
|------------|------------|-----------|-----------|------------|----------|
| 1. 黒崎種田遺跡 | 2. 八日市遺跡 | 3. 鶴川館跡 | 4. 上野井田遺跡 | 5. 二俣遺跡 | 6. 吉岡遺跡 |
| 7. 藤田瑞泉寺遺跡 | 8. 恵王寺遺跡 | 9. 若竹町遺跡 | 10. 下熊野遺跡 | 11. 安養寺遺跡 | 12. 辰尾遺跡 |
| 13. 上熊野遺跡 | 14. 任海宮田遺跡 | 15. 吉倉日道跡 | 16. 任海遺跡 | 17. 南中田D遺跡 | 18. 友松遺跡 |
| 19. 上新保遺跡 | 20. 布市北遺跡 | 21. 石田北遺跡 | 22. 二俣北遺跡 | 23. 石田遺跡 | 24. 布市遺跡 |

第1図 黒崎種田遺跡と周辺の遺跡 (1:50000)

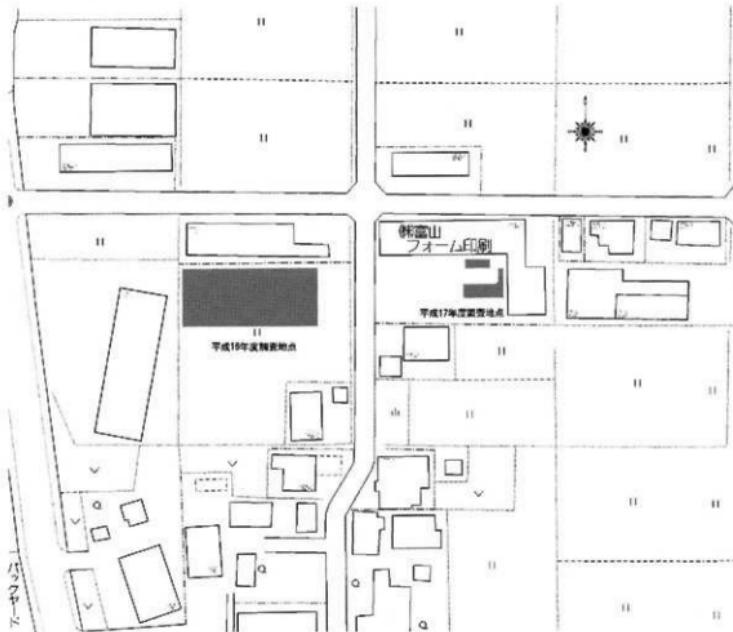
II 調査の経緯

黒崎種田遺跡は、昭和63年～平成3年に富山市教育委員会が実施した市内の分布調査で発見された遺跡である。その際には、土師器や須恵器、珠洲焼等が採集され、古代から近世にわたる散布地とされた。遺跡は№480黒崎種田遺跡として富山市遺跡地図に登載され、周知の埋蔵文化財包蔵地として知られることとなった。包蔵地範囲は390,000m²である。

平成16年10月、富山フォーム印刷株式会社より黒崎地内における駐車場建設について協議があり、市教委による試掘確認調査を同月実施したところ、工事予定面積964m²のうち670m²に中世土坑、中世土師器等の存在を確認した。この結果に基づき、工事計画との調整を重ねた結果、確認範囲全域について発掘調査を実施することとした。調査は民間発掘調査機関に委託して実施することとし、平成17年1月13日付けで、富山フォーム印刷株式会社、市教委、株式会社中部日本鉱業研究所の三者で協定を締結した。発掘調査は、平成17年1月27日から同年3月18日まで実施し、以後整理を行った。

また平成17年2月、隣接地において工場増築計画について協議があり、640m²を対象に試掘確認調査を実施した。その結果238m²の範囲に平安時代の遺物包含層、土師器、須恵器、中世陶器等を確認した。協議の結果、建物基礎部分105m²について発掘調査を実施することで合意し、同年6月13日実施機関中部日本鉱業研究所を含めた三者で協定を締結した。

発掘調査は、平成17年6月16日から同年7月21日まで実施し、以後同年11月20日まで整理を行い、発掘調査報告書を刊行した。
(中本)



第2図 調査位置図 (1:1000)

III 調査の概要

i) 平成16年度調査

1. 調査概要

(1) 調査の方法

平成16年度の発掘調査は駐車場建設地である670m²を対象に、平成17年1月27日から3月18日まで現地調査を実施した。境界測量の後、バックホウにより機械掘削を開始。耕作土を除去する。機械掘削終了後はグリッド設定を実施した。座標は公共座標を基準として南北をX軸、東西をY軸にとり、5m間隔で基準杭を打設した。杭を基点として調査区に1辺5mの正方形グリッドを設定し、グリッド北西隅の杭を基準として南北をアルファベット、東西を数字としてグリッド名とした。

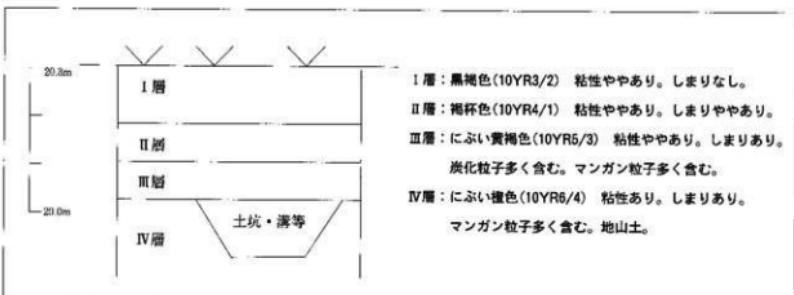
グリッド設定後、包含層掘削、遺構掘削を実施した。掘削作業は人力にて行い、バックホウは掘削残土の移動積上げにのみ使用した。包含層からの出土遺物はグリッドごとに、遺構内出土遺物は各遺構ごとに分類し取上げを行った。

掘削作業と平行して遺構の計測・図化作業を実施。平面図はトータルステーションによる計測を基本とし、必要に応じて1/10の微細図を併せて作成した。土層断面図は1/20で作成し、分層後に土色帳に基づいて土層注記を行った。また図面作成と平行して調査の各段階で写真撮影を実施した。撮影には35mm 1眼レフカメラ2台を用い、モノクロ・カラーの各フィルムを使用した。遺跡の全体写真や重要と思われる遺構については、中版(6×7版)カメラを用いて撮影を行った。またメモ写真としてデジタルカメラによる撮影も随時行った。

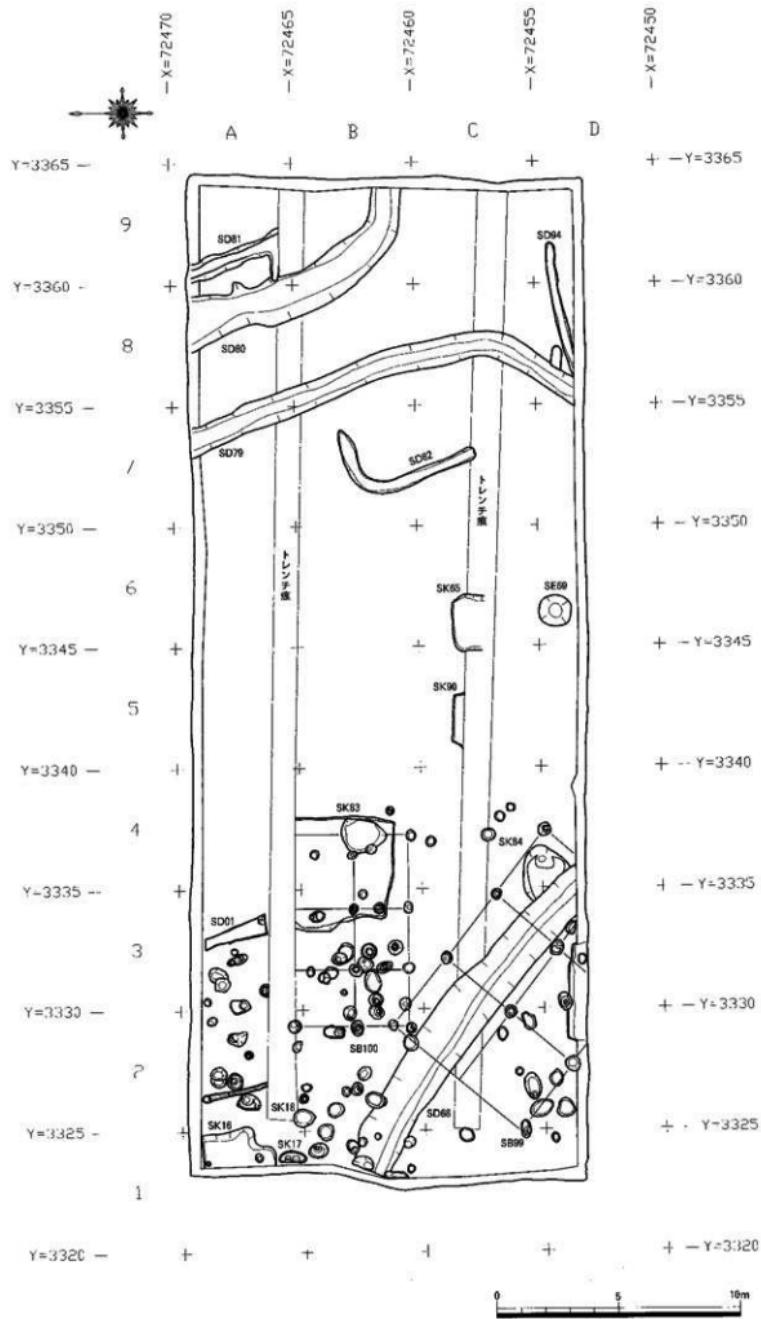
現地調査終了後は、株式会社中部日本鉱業研究所出土品整理所へ移動し、遺物整理及び報告書作成業務を実施した。平成17年11月20日には整理業務を終了し、報告書の刊行に至った。

(2) 基本層序

調査区の基本層序は4層からなる。上層から順に水田耕作土（I層）、旧水田耕作土（II層）、遺物包含層（III層）、地山（IV層）に分層される。I層は黒褐色粘質土。土中に植物根を含む締まりの無い水田耕作土である。II層は褐灰色粘質土。I層よりやや締まりのある粘質土であり、旧水田の耕作土である。III層はにぶい黄褐色粘質土。炭化物やマンガン粒子が多く含む層であり、遺物をわずかに包含する。IV層はにぶい橙色粘質土で地山土である。土坑、溝等の遺構はこのIV層上面にて確認された。現地表面の標高は約20.3m、地山面までの深さは約30cmである。



第3図 基本層序図(約1:10)



第4図 平成16年度調査区全体図 (1:200)

2. 遺構

(1) 壺穴状土坑

SK83（第5図） 調査区の西側で検出した土坑である。平面形はほぼ方形を呈しており、東西4.74m、南北4.07m、深さ10~45cmを測る。土坑の北端部分はトレンチにより削平されている。床面はほぼ平坦で、しまりのある灰白色粘土で硬く踏み固められている。掘り込みは西側で浅く、東側で深くなり、壁際には直径40cm前後の柱穴とみられる小ビットが複数確認されている。また壺穴の南東端には土坑状の窪みがあり、長軸1.9cm、短軸1.4m、深さ45cmを測る。窪みの埋土は炭化物を多く含み、底面近くでは大量の木片や樹皮等が堆積して壠状を呈している。出土遺物は、中世土師器の小皿・碗、珠洲の壺・鉢、青磁の碗等が出上しており、僅かではあるが鐵滓や炉壁もみられる。また窪み部分の底面からは大量の木片とともに羽子板状の木製品1点が出土している。

このSK83は、後述するSK100と重なるように検出されているため、両者は同一の遺構である可能性が考えられる。しかし柱穴と土坑の配置に若干のズレが認められるうえ、土層堆積状況の観察からも両遺構を結びつける明確な根拠を見出せない。したがって、本稿では両者を別個の遺構として捉えることとし、それぞれ個別に記載する。

(2) 捩立柱建物

SB99（第6図） 調査区の南西部で検出した撗立柱建物である。建物構造は2間×3間で、柱距離は約3.5m、真北に対しN・40°-Eの傾きを持つ。柱列がSD68を跨ぐように配置されている。建物の南東端は調査区外へ伸びているが、建物平面の専有面積は約74m²とされる。トレンチ跡により一部の柱穴が欠損している。所属時期は13世紀とする。

SB100（第5図） 調査区の西側中央で検出された撗立柱建物である。SK83に重なるように検出されており、建物構造は2間×3間で、柱間距離は約2.5~3m、建物平面の専有面積は約40m²とみられる。柱穴は8基確認しており、ほぼ南北軸に沿って配される。それぞれ直径45~65cmの円形または椭円形で、深さは35~55cmを測る。トレンチにより一部の柱穴は欠損している。所属時期はSK83とほぼ同時期とみられる。

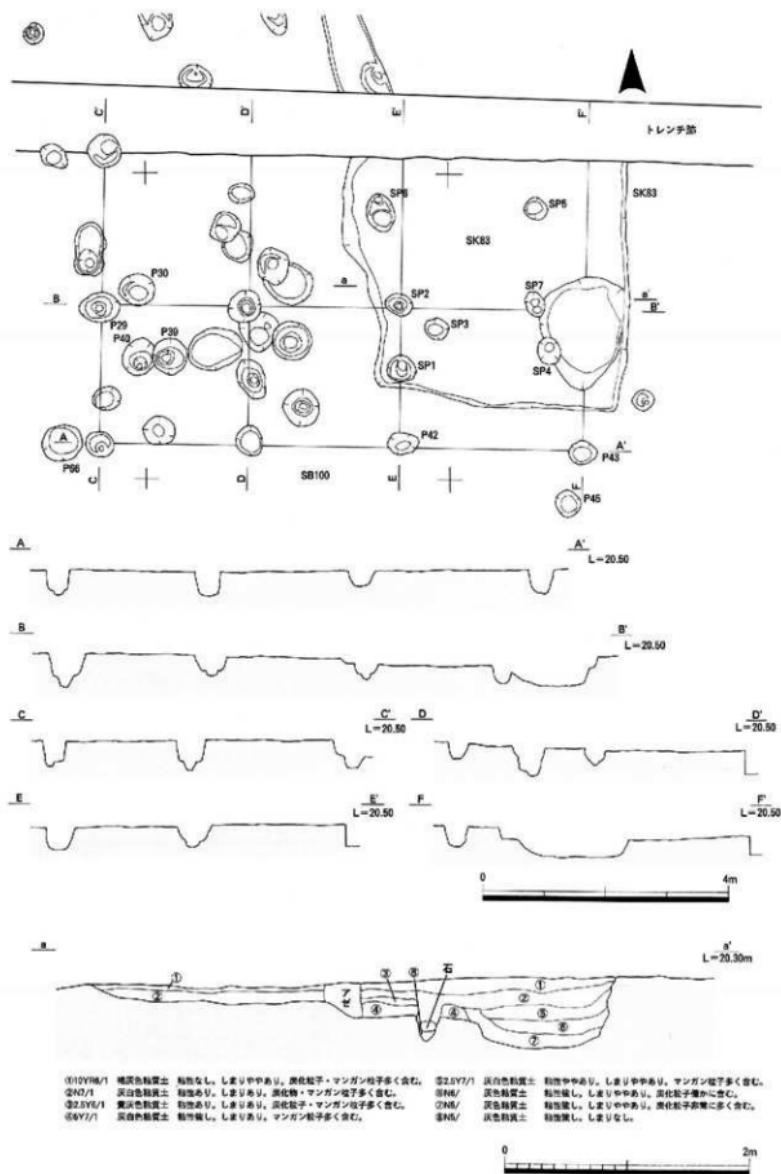
(3) 溝状遺構

SD68・SD79・SD80（第6図） SD68は調査区南西部で検出した溝である。調査区を北西から南東へ横切っており、幅は1.5~2cm、地山からの掘り込みは50~60cmである。溝の両端は調査区外へと伸びており、調査区内に残存する総延長は約14.5mで、南東端でSK84を切るように流れる。底面からの立ち上がり部分には、土留めのためとみられる木杭や板が壁面に食い込むように検出された。溝の覆土からは、須恵器、中世土師器、珠洲、越中瀬戸、唐津の他、青磁の盤が出土している。出土遺物から、溝の所属時期は12世紀後半~13世紀とみられ、撗立柱建物跡や壺穴状土坑とほぼ同時期のものとみられる。

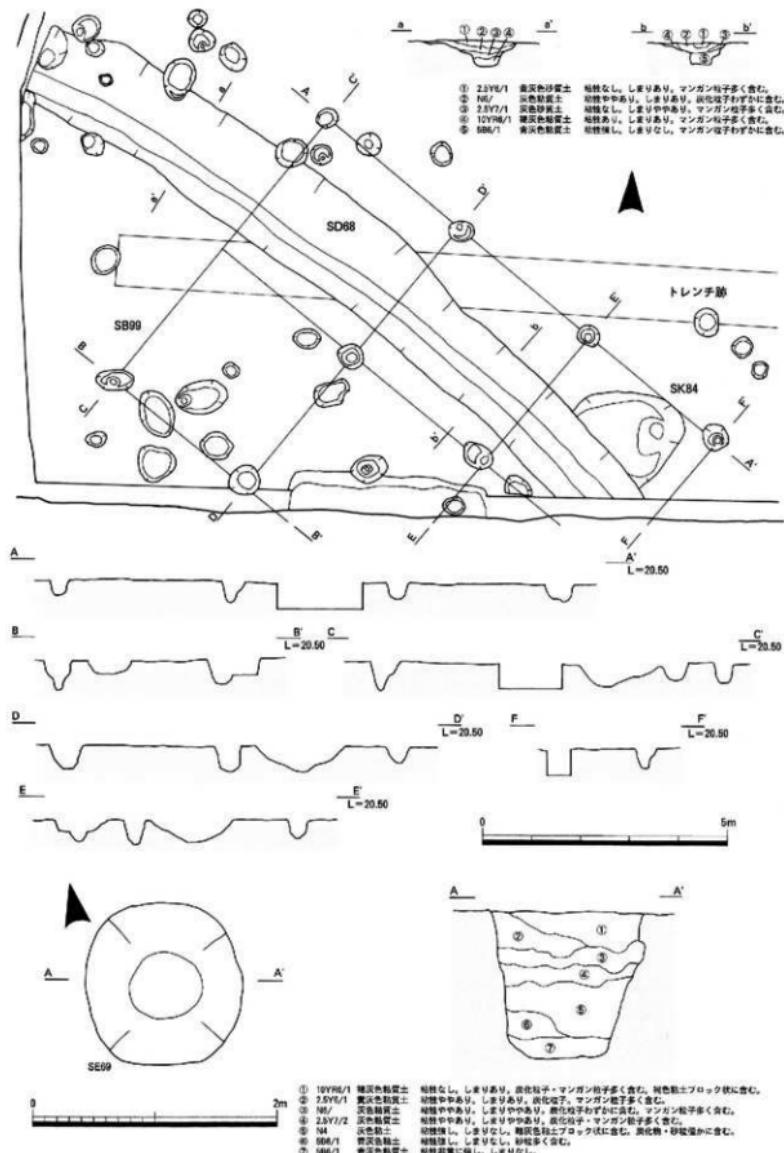
SD79・SD80は調査区の東端で検出された溝である。SD79は調査区を南北に横切り、SD80は調査区の北端から南へ伸びた後、東へ曲がって調査区外へ伸びる。SD79からは古墳時代の甕が出土しており8世紀頃に属するとみられる。SD80からは白磁及び珠洲が出土しており、12~13世紀に属する。

(4) 井戸

SE69（第6図） 調査区の中央南寄りで検出した井戸である。平面形はほぼ円形で、開口部は長軸1.4m、短軸1.5mで、深さは1.2mを測る。井戸枠のない素掘りの井戸である。断面形は底面より緩やかに外傾しつつ立ち上がる。開口部近くの東側壁面には小さな凹み部分がみられる。出土時期を示す遺物は検出されてないが、下層部分からは箸状の木製品が出土している。



第5図 SK83・SB100 平・断面図 (1:40, 1:80)



第6図 SD68・SB99・SE69 平・断面図 (1:40, 1:50)

3. 遺物

本調査区からは、中世土師器の皿・塊、珠洲の鉢・大甕、青磁の塊・盤等が出土しており、主に12~13世紀に属するとみられる。また、わずかではあるが古墳時代の土師器や17世紀の染付等も検出している。ここでは、遺構内出土遺物を中心に出上遺物を概観していきたい。

SK 8 3 (第7図)

中世土師器 1~6は中世土師器の小皿で、口縁部のみの小片である。推定口径は7.5~12cm。手づくね成型されており、口縁に一段ナデが施される。底面は未調整である。内面に煤が付着するものもある。7は皿の口縁部小片である。推定口径は15.6cm。ロクロ成型されており、内外面にロクロナデが施される。小皿・皿ともに12世紀~13世紀初頭に属する。

青磁 青磁は碗が出土しており、いずれも口縁部のみの小片である。8は推定口径19.7cm、体部は緩やかに立ち上がり、外面に連弁文が施される。9は推定口径14.6cm、体部は湾曲しつつ立ち上がり、口縁で大きく外反し、端部でわずかに立ち上がる。内面に連弁文が施される。8・9ともに緑青色釉が厚くかかる。12世紀~13世紀初頭に属する。

珠洲 10は壺の底部破片である。底径9.7cm、体部は外傾しつつ緩やかに立ち上がる。内外面にロクロナデが施される。古岡編年Ⅲ期、13世紀前半のものとみられる。

木製品 11は堅穴内の土坑部分から出土した杓子状木製品である。材質はスギ材で、長さは29.0cm、幅は板部分で7.5cm、柄部分で3.5cm、厚さは0.3cmを測る。板部分の先端は円形に加工されており、背面にはケズリにより平面を作り出している。石川県穴水町白山橋遺跡の祭祀遺構などに類例が見られ、祭祀的な性格の強い遺物とみられる。

P 26、86、SD01 (第7図)

中世土師器 12・13・15は小皿の小片である。推定口径は8~11cmで、手づくね成型されており、内外面にナデが施される。14は碗の口縁部小片。推定口径は10.8cmで、ロクロ成型されており、内外面にロクロナデが施される。

SK16、17、18 (第7図)

中世土師器 16~18・21は小皿及び皿である。推定口径は7~11cm。手づくね成型されており、内外面にナデが施される。底面は未調整である。17は内面に煤が付着する。19はロクロ成型された塊である。推定口径は10.7cm。内外面にロクロナデが施される。

珠洲 20は擂鉢の小片である。体部は外傾しつつ立ち上がり、口縁にて内湾する。口縁端部は面取りされる。内外面ともにロクロナデが施され、内面にはオロシメが施される。

土錘 22~24は管状土錘。長さ3.8~6.25cm、幅1.4~1.8cm。いずれも形状は樽型を呈する。

P 23、24、67、73、76、78 (第7図)

中世土師器 25~28、31~36は中世土師器の小皿である。口径7.6~9.6cm。手づくね成型されており、内外面にナデが施される。底面は未調整である。外面口縁部に一段ナデが施されるもの(31)や、煤が付着するもの(27・33)がみられる。

青磁 29は碗の口縁部破片である。推定口径16.9cm。灰オリーブ色の釉が薄くかかる。外面には連弁文がわずかに確認できる。12世紀後半に属する。

珠洲 30は鉢の口縁部小片。内外面にロクロナデが施され、口縁端部は面取りされている。

SD 6 8 (第7図・第8図)

青磁・青白磁 37は青白磁の梅瓶。底部付近の小片である。内外面に明緑灰の釉薬がうすくかかり、外面には渦文と二条線が施される。38は青磁の塊。底部高台部分の小片である。全体に緑白色の釉薬が

厚く施される。41は青磁の盤である。推定底径は14cm、高台長は1.2cmを測る。青白綠灰色の釉が厚くかかり内面に蓮弁文が施される。12世紀後半～13世紀に属する。

越中瀬戸・唐津・越前 39は越中瀬戸の小皿。口縁～脚部の一部のみ残存する。推定口径は11.0cm、体部は大きく外反しつつ立ち上がる。口縁部付近に灰白色の釉薺が薄く施される。40は唐津焼の擂鉢である。底部の小片のみ残存しており、内面にオロシメが施される。42は越前焼の甕である。推定口径は42.6cm、口縁帯は退化して端部が外に開き、内面には沈線が残る。14世紀に属する。

珠洲 43は珠洲の大甕。口縁～体部の破片資料である。推定口径は59.5cm、口縁が大きく外反し、やや肥大化する。体部外面はタキが施される。44は擂鉢の底部破片。推定底径は6.0cm。内面にオロシメが施される。45・46は擂鉢の口縁部である。口縁は大きく開き、端部は面取りされている。45は内面にオロシメがわずかに残る。大甕・擂鉢とともに吉岡編年(吉岡1994)のⅢ期、12世紀後半に属する。

木製品 47は棒状木製品。長さ12.6cm、幅8.5cm、厚さ6.5cm。全体に縱方向のケズリが施される。用途は不明。48は箆状木製品。長さ15.7cm、幅2.2cm、厚さ0.3cm。先端部分は薄く加工され、やや炭化している。49は板状木製品。長さ26.6cm、5.5cm、厚さ0.7cm。表裏に薄くケズリをかけ、平坦面を作りだしている。上留めに用いた板材と思われる。

S K 8 4 (第8図)

中世土師器 50～54は小皿の小片。推定口径は7.4～9.2cm、いずれも手づくね成型されている。内外面はナデが施され、底部は未調整である。外部に一段ナデが施されるもの(53・54)もある。55～57は皿。口径は13.9～17.8cmを測る。55・56は口縁に一段ナデが施される。

その他の遺物 58は釣状の鉄製品。長さ2.4cm、幅0.6cm、重さ0.93gを測り、端部は欠損している。59は不定形な金属片で、長さ5.6cm、幅2.1cm、重さ17.6gを測る。用途は不明である。

P 3 2 、 5 4 、 5 5 、 5 6 、 6 0 、 6 1 (第8図)

中世土師器 小皿(60・61・63・64・67)及び皿(62・65・66)が出土している。小皿は口径7.6～9cmを測り、手づくね成型されている。口縁部には一段ナデが施され、底部は未調整である。皿は口径12.5～13.3cmで、同様に手づくね成型である。内外面にナデが施され、底面は未調整となっている。

珠洲 68は鉢の小片である。推定口径は20.9cm、体部は外反しつつ立ち上がり、口縁端部は面取りされる。内外面ともにロクロナデが施される。吉岡編年Ⅲ期、12世紀後半に属する。

その他の遺物 69は鶴の羽口の一部である。先端部分には鉄分が付着している。70は刀子とみられる鉄製品で、長さ7.0cm、幅1.5cm、厚さ0.7cmを測る。先端及び柄部分が欠損している。

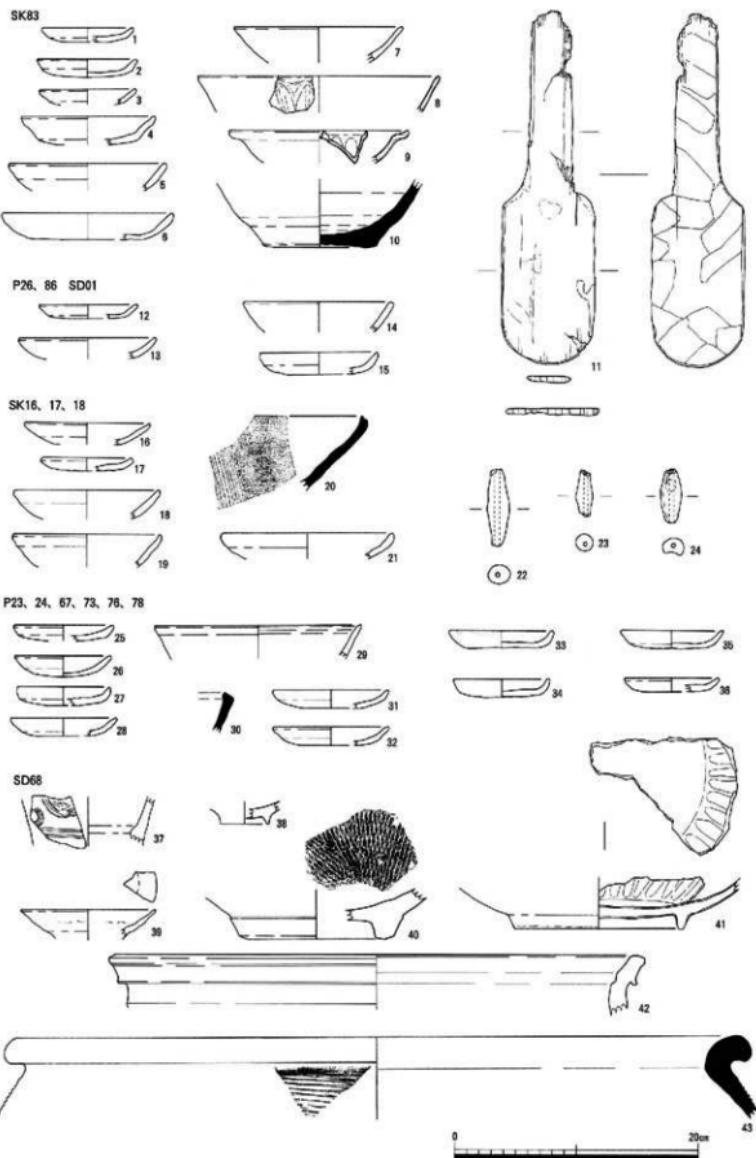
S D 7 9 ～ S D 8 0 (第8図)

土師器 SD79からは古墳時代の土師器が出土している。71は甕の脚部下半部で、残存高10cm、最大径19cmを測る。底部は丸底で体部は卵型を呈しており、内外面はハケで調整されている。72は土師器の甕の口縁部。推定口径は19.7cmで、頸部から口縁にかけて大き開く。6世紀に属する。

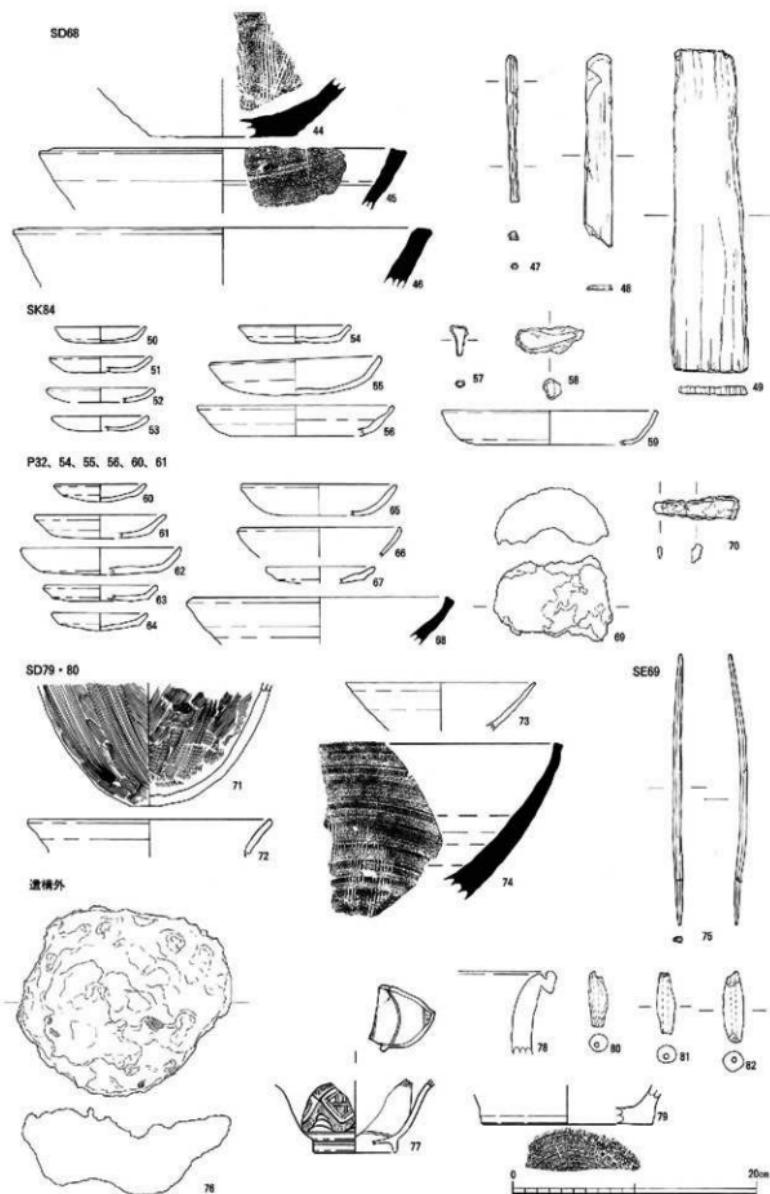
白磁・珠洲 SD80からは白磁と珠洲が出土している。73は白磁の碗。推定口径は15cmを測り、内外面に灰オリーブ色の釉が薄く施される。80は珠洲の鉢。体部は外傾しつつ立ち上がり端部は面取りされる。内面にオロシメが施される。

遺構外(第8図)

包含層内からは中世から近世にかけての遺物が出土している。76は碗型甕で重量21gを測る。77は染付の碗。破損した破片を接着した痕が残る。78は八尾の甕。口縁部のみの小片で、内外面にロクロナデが施される。79は越中瀬戸の匣鉢。底部のみ残存しており推定底径は13.6cmを測る。内外面に鉄釉が薄く施される。80～82は管状土錠。長さ4.5～5.0cm、幅1.5～1.7cm、形状は樽型である。 (高野)



第7図 遺構内出土遺物 (1 : 4)



第8図 遺構内及び遺構外出土遺物 (1 : 4)

番号	選択別	施設		床面積 (m ²)	平均プラン	施設周辺各所	権上半導	山上畜舎	時刻	備考		
		高さ (m)	幅 (m)									
1	S.D.	261	25	30	-	西内側 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面+天井	医療施設	120度等～130			
2	P	76	69	68	-	西内側 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面					
3	P	67	62	48	-	西内側 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面					
4	P	59	59	45	-	西内側 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面					
5	P	29	39	37	-	西内側 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面					
6	P	42	38	51	-	西内側 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面					
7	P	37	38	53	-	西内側 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面					
8	P	24	51	43	-	西内側 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面					
9	P	24	51	42	-	西内側 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面					
10	P	64	39	50	-	西内側 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面					
11	P	69	66	56	-	西内側 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面					
12	S.D.	272	22	32	-	西内側 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面		120度等～130			
13	P	92	64	59	-	西内側 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面					
14	P	48	56	40	-	西内側 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面					
15	P	29	38	38	-	西内側 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面					
16	S.K.	309	165	71	-	东外 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	土屋	120～130			
17	S.K.	112	68	40	-	东外 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	土屋	120～130			
18	S.S.	93	46	37	-	东外 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	土屋	120～130			
19	P	23	69	53	-	东外 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	土屋	120～130			
20	P	73	66	54	-	东外 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	土屋	120～130			
21	P	69	36	53	-	东外 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	土屋	120～130			
22	P	68	58	56	-	东外 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	土屋	120～130			
23	P	41	37	41	-	东外 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	土屋	120～130			
24	P	54	47	54	-	东外 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	土屋	120～130			
25	P	62	60	60	-	东外 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	土屋	120～130			
26	P	88	92	53	-	东外 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	土屋	120～130			
27	P	57	37	38	-	东外 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	土屋	120～130			
28	P	42	45	31	-	东外 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	土屋	120～130			
29	P	67	69	64	-	东外 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	土屋	120～130			
30	P	67	52	34	-	东外 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	土屋	120～130			
31	P	46	38	34	-	东外 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	土屋	120～130			
32	P	61	42	31	-	东外 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	土屋	120～130			
33	P	49	42	31	-	东外 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	土屋	120～130			
34	P	85	89	37	-	东外 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	土屋	120～130			
35	P	63	64	45	-	东外 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	土屋	120～130			
36	P	63	62	74	-	东外 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	土屋	120～130			
37	P	69	41	58	-	东外 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	土屋	120～130			
38	P	49	42	31	-	东外 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	土屋	120～130			
39	P	69	66	51	-	东外 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	土屋	120～130			
40	P	82	53	38	-	西内側 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	土屋	120～130			
41	P	63	47	33	-	西内側 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	土屋	120～130			
42	P	65	59	42	-	西内側 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	土屋	120～130			
43	P	45	39	31	-	西内側 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	土屋	120～130			
44	P	53	37	40	-	西内側 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	土屋	120～130			
45	P	43	42	48	-	西内側 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	土屋	120～130			
46	P	44	44	41	-	西内側 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	土屋	120～130			
47	P	58	54	38	-	西内側 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	土屋	120～130			
48	P	47	41	38	-	西内側 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	土屋	120～130			
49	P	57	59	57	-	西内側 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	土屋	120～130			
50	P	77	59	59	-	西内側 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	土屋	120～130			
51	P	37	32	62	-	户内 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	小丘	120～130			
52	P	111	66	34	-	户内 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	山田	120～130			
53	P	71	65	31	-	户内 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	山田	120～130			
54	P	102	66	34	-	户内 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	山田	120～130			
55	P	77	43	58	-	户内 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	山田	120～130			
56	P	77	42	65	-	户内 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	山田	120～130			
57	P	43	32	56	-	户内 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	山田	120～130			
58	P	62	65	55	-	户内 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	山田	120～130			
59	P	71	48	48	-	户内 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	山田	120～130			
60	P	61	45	47	-	户内 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	山田	120～130			
61	P	35	39	23	-	户内 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	山田	120～130			
62	P	104	39	32	-	户内 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	山田	120～130			
63	P	27	23	35	-	户内 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	山田	120～130			
64	P	41	38	24	-	户内 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	山田	120～130			
65	P	69	44	34	-	户内 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	山田	120～130			
66	P	87	85	34	-	户内 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	山田	120～130			
67	S.D.	149	173	208	-	-	S.D.を除く	中庭+壁面+山	中庭+壁面+山	120～130		
68	S.E.	135	126	118	-	内側 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	栗原	120～130			
69	S.E.	44	33	99	-	内側 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	栗原	120～130			
70	P	43	37	21	-	内側 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	栗原	120～130			
71	P	44	36	21	-	内側 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	栗原	120～130			
72	P	45	38	21	-	内側 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	栗原	120～130			
73	P	44	36	21	-	内側 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	栗原	120～130			
74	P	44	36	21	-	内側 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	栗原	120～130			
75	P	44	43	21	-	内側 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	栗原	120～130			
76	P	44	36	21	-	内側 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	栗原	120～130			
77	P	44	36	21	-	内側 P3に面する北	自然光導 中庭+壁面	栗原	120～130			
78	S.D.	1710	1095	716	17	-	-	-	-	120～130		
79	S.D.	1049	1200	799	37	-	-	-	-	120～130		
80	S.D.	1019	1200	799	37	-	-	-	-	120～130		
81	S.D.	226	64	211	29	-	-	-	-	120～130		
82	P	71	54	54	15	-	-	-	-	120～130		
83	S.K.(空き地)	173	173	173	40	京瀬	自然光導 中庭+壁面	京瀬	京瀬	120～130		
84	S.K.	43	42	42	42	京瀬	自然光導 中庭+壁面	京瀬	京瀬	120～130		
85	P	41	36	25	-	京瀬	自然光導 中庭+壁面	京瀬	京瀬	120～130		
86	P	63	49	39	-	京瀬	自然光導 中庭+壁面	京瀬	京瀬	120～130		
87	L	26	26	18	-	京瀬	自然光導 中庭+壁面	京瀬	京瀬	120～130		
88	P	41	41	53	-	京瀬	自然光導 中庭+壁面	京瀬	京瀬	120～130		
89	P	63	51	38	-	京瀬	自然光導 中庭+壁面	京瀬	京瀬	120～130		
90	S.K.	232	48	48	8	京瀬	自然光導 中庭+壁面	京瀬	京瀬	120～130		
91	P	89	52	43	-	京瀬	自然光導 中庭+壁面	京瀬	京瀬	120～130		
92	P	62	57	39	-	京瀬	自然光導 中庭+壁面	京瀬	京瀬	120～130		
93	P	41	36	25	-	京瀬	自然光導 中庭+壁面	京瀬	京瀬	120～130		
94	S.D.	239	32	46	16	-	F&Gを除く	自然光導 中庭+壁面	京瀬	京瀬	120～130	
95	S.I.D.	95	44	12	-	-	-	-	-	120～130		
96	P	39	36	59	69	森	自然光導 中庭+壁面	森	森	120～130		
97	P	71	66	66	-	森	自然光導 中庭+壁面	森	森	120～130		
98	P	43	43	61	61	森	自然光導 中庭+壁面	森	森	120～130		
99	S.B.	1500	700	71	71	森	自然光導 中庭+壁面	森	森	120～130		

表1 平成16年度調査区 遺構観察表

表2 平成16年度調査 土器・陶磁器観察表

表3 平成16年度調査区 土製品・金属製品・木製品観察表

ii) 平成17年度調査

1. 調査概要

(1) 調査の方法

平成17年度の調査は株式会社富山フォーム印刷工場増築工事に伴うものであり、前年度の調査箇所から道路を挟んで約30mの距離に位置する。調査対象範囲は、遺跡に対して工場増築箇所の建物基礎部分の掘削深度が深く影響を及ぼす可能性のある箇所の調査であったため、調査区はコの字状を呈し、調査の便宜上それらを1区・2区・3区と分けて調査を行った。調査面積は105m²であった。

調査はまず重機による表土掘削を行い、人力による造構検出を行った。その結果、奈良・平安時代の溝を中心に竪穴建物、土坑、中近世の溝などを検出した。

造構検出後、1区から造構掘削を開始し、2区、3区へと作業を進めた。造構掘削作業と平行し、十層断面図作成や造構写真撮影を行い、造構平面図はトータルステーションによって1/20・1/100の図面を作成した。調査区全景撮影は高所作業車を使用して撮影し、屋外作業は終了した。その後は報告書作成作業に入り、平成17年11月20日に報告書の刊行に至った。

(2) 基本層序

基本層序は4層からなっている。I層は表土層で、0.7m～1.0mほど堆積する。II層は植物遺体を含む層で、黒褐色(2.5Y3/1)上。層厚は0.2mほどである。遺物は出土しなかった。III・IV層は遺物包含層である。出土した遺物には時期差はさほど感じられず、堆積も時間的隔たりが存在したとは考えにくい。III層は黒褐色(2.5Y6/3)土、層厚は0.2mを測る。IV層は黒褐色(2.5Y3/3)土で、層厚は0.3mである。

2. 造構

造構は、奈良・平安時代を中心とした溝や中近世の溝、竪穴建物、土坑などを検出した。

(1) 溝

S D 1 (第9図)

1区・3区で検出した溝である。ほぼ南北方向に向かって走り、1区ではSD1がSD2を切る形であった。規模は確認できた範囲で、1・2区合わせて全長約12mを測り、最大上幅約2.54m・深さ0.25mである。1区のSD1では西側にテラス状の平坦な段を設けていた。このテラスは土層断面の観察では、覆土の埋没状況から掘り直しなどの痕跡は見られず、溝と一体なものと考えられる。3区では明確なテラス状の平坦面は確認できなかった。

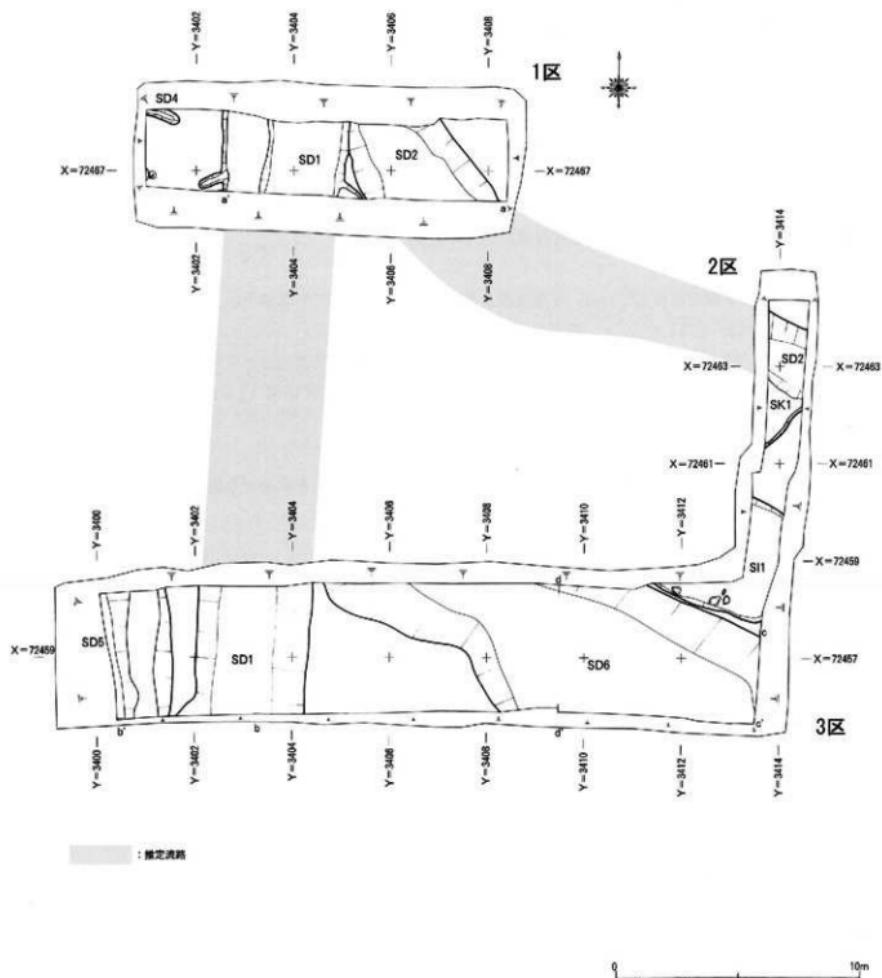
遺物は須恵器壺・壺や上師器壺・壺などが見られたが、出土位置は溝底面直上ではなく、全て覆土中であり、小破片がほとんどである。

出土遺物の時期は8世紀後半から9世紀代のものが中心で、開削時期は不明ながらも、埋没段階の時期はこの時期と考えられる。

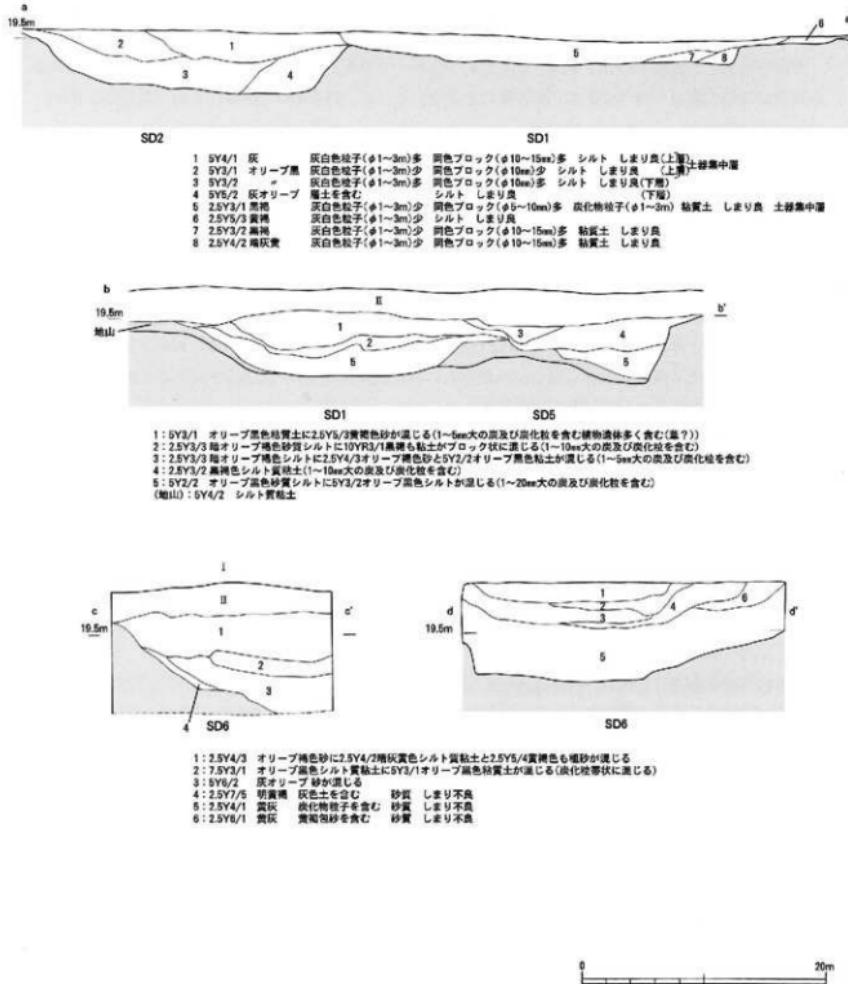
S D 2 (第9図)

1区・2区で検出した溝である。北西-東南方向に向かって走り、1区ではSD2がSD1に切られる形であった。規模は1・2区合わせて全長約10.5mを測り、最大上幅約2.36m・深さ約0.49mである。断面形状は西側へ緩やかな傾斜をもっており、自然堆積を示す状況であった。

遺物の出土は須恵器蓋・壺・壺・瓶類や上師器壺・壺などが出土した。出土位置は溝底面直上ではなく全て覆土中であり、小破片がほとんどである。時期は8世紀後半頃の遺物が中心である。



第9図 平成17年度調査区全体図 (1 : 100)



第10図 SD 1、2、5、6 土層断面図 (1 : 40)

S D 6 (第9図)

3区で検出した溝である。本遺跡唯一の中近世遺構である。S D 1と前後関係にあり、S D 5はS D 1より新しい。規模は確認できる範囲で全長2.6m・最大上幅1.16mであり、堆積は自然堆積を呈する。遺物は漆器碗が覆土上層から1点出土したのみで、他の遺物は見られなかった。S D 1と同一方向へ向いて走っているものの、1区では確認できず、やや西側へ傾いていくと考えられる。

S D 6 (第9図)

3区で検出した大溝である。北西一東南方向へ向かって走る。遺構の切り合いはないものの、本遺構の周辺には竪穴建物1棟(S I 1)が近接して立地している。両遺構の配置状況や出土遺物から考え、双方が同時期存在していたとは考えがたく、S D 6がS I 1より新しいと見られる。

規模は確認できた範囲での全長が約5.38m・最大上幅約3.98m・深さ約0.82mを測る。上層観察から覆土は6層からなり、土色・土質などで類似する層の堆積で、互層の様な形で混入していた。その事から埋没は下層で層厚のある第5層が短期間に多量な土砂の堆積があり、時間を置かず徐々に埋没した事が看取できた。大溝底面である最下層は礫層であった。

遺物の出土は最下層からのものが多く、大溝底面のくぼみにたまたま形で、9世紀後半から10世紀初頭頃の土師器壺などの遺物が集中的に出土した。これら遺物は大溝が開口していた時に投棄ないしは廻棄されたものと考えられる。埋没時期は、上層・中層から出土した遺物もあるものの、最下層から出土した遺物と、第4層中に顕著に見られた炭化物の放射性炭素測定年代の860±30という結果(第V章参照)から、9世紀後半から10世紀初頭頃と考えられる。

b. 竪穴建物

S I 1 (第11図)

2区と3区の接する場所で検出した竪穴建物である。遺構の大部分は調査区域外へ広がる。規模は長軸2.5m・短軸0.64mであり、確認できた範囲での床面積は9.65m²であった。S D 6とは立地の状況から同時期存在とは考えがたく、出土遺物からS D 6より先行した遺構と考えられる。柱穴や周壁溝などの検出はなく、貼床や床面上の硬化面も検出しなかった。竈は南西側に付き、出土状況は良好であったとは言えないものの、袖石と考えられる疊には被熱を受けた痕跡が見られた。付近の堆積土には、微量ではあるが炭化物、焼土粒子が混入し、竈周辺からは、土師器壺の破片が集中的に出土した。竈の覆土は遺構自体の深さが浅いものの、自然堆積であったと考えられる。

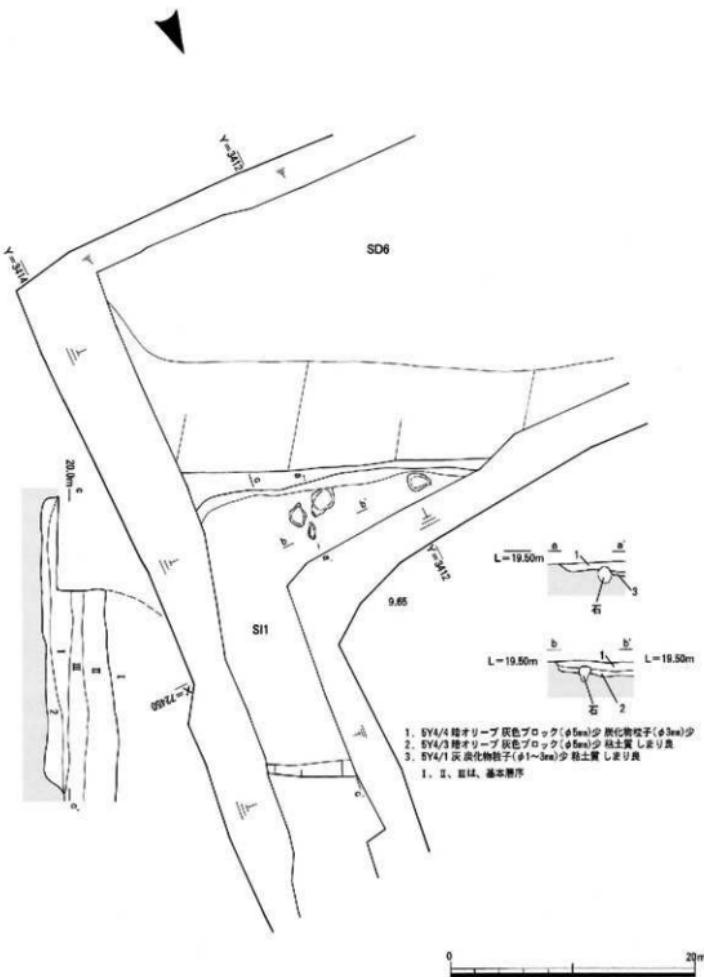
遺物は、竈付近から土師器壺が出土し、それ以外の須恵器壺A・壺B・横瓶などは床面からやや浮いて出土した。時期は8世紀中葉頃と考えられる。

c. 土坑

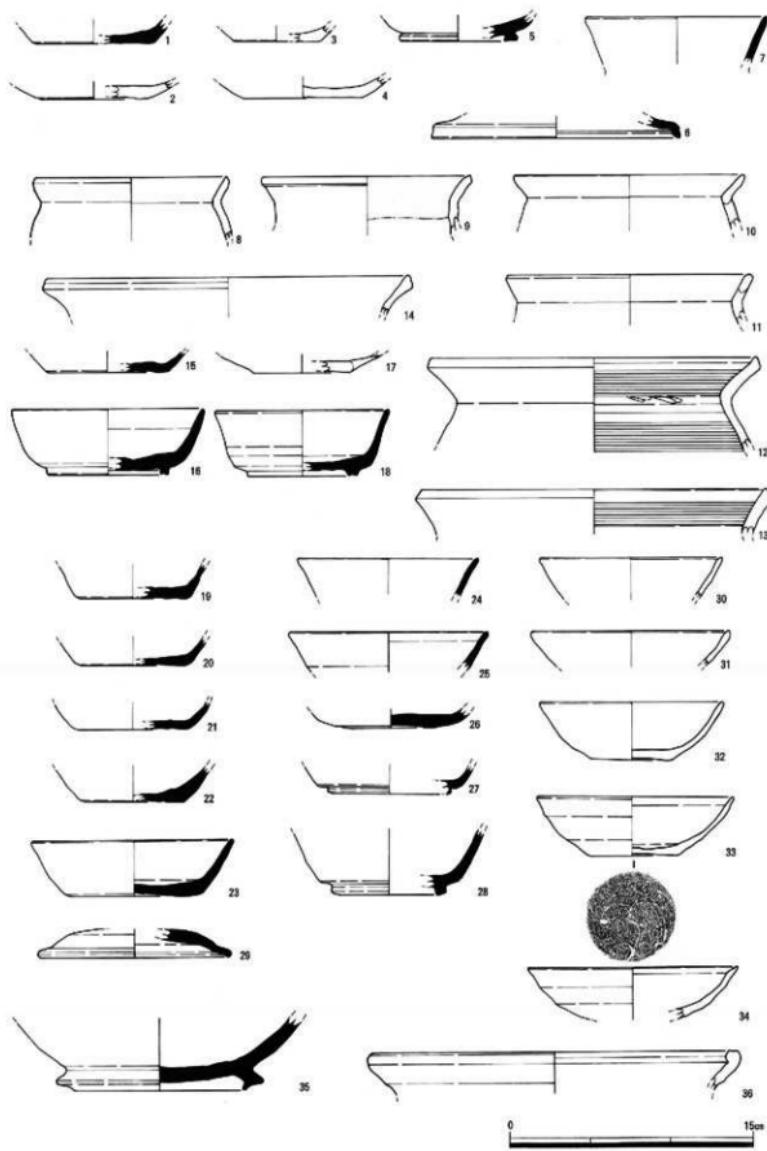
S K 1 (第9図)

2区で検出した土坑であり、今回の調査地点で唯一の土坑である。遺構は竪穴建物のすぐ北側で検出し、S D 2に切られていた。遺構の大部分は調査区域外へ広がり、全体像は不明である。しかし遺構自体の深さが浅く、平面プランも方形を呈しているため、竪穴建物の可能性も考えられる。規模は、長軸0.78m・短軸0.44mを測る。

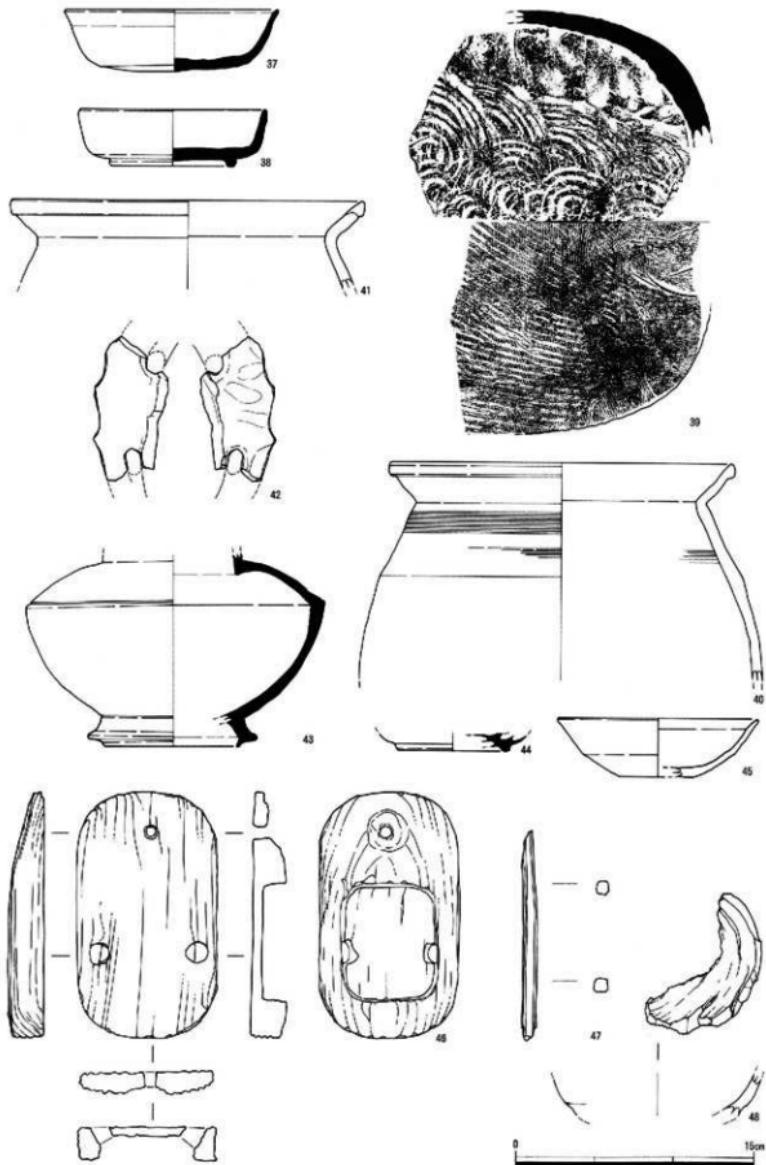
遺物は時期不明の土師器壺の破片が1点のみ覆土中から出土した。



第11図 SI1造橋平面図・断面図 (1 : 40)



第12図 遺構出土遺物実測図 (1 : 3)



第13図 遺構出土遺物実測図 (1 : 3)

表4 平成17年度調査土器総容積

试验日期	地点	小麦品种		播期	亩产	水分	含水率	品质
		品种	株高					
1957.9.10	白城	白城 1 号	85 厘米	7 月 2 日	18.2	15.5%	15.5%	90
1957.9.10	白城	白城 2 号	85 厘米	7 月 2 日	18.2	15.5%	15.5%	92
1957.9.10	白城	白城 3 号	85 厘米	7 月 2 日	18.2	15.5%	15.5%	93

表5 平成17年度木製品観察表

遺跡番号	調査区	発掘場所	測量				下正ブラン	直標開削後傾斜	南北堆疊	出土遺物	時期	備考
			長軸 (m)	短軸 (m)	高さ (m)	北西標						
SII-1	I 区	溝	1.48	2.54	0.25	—	SD1切られ	冬鳥居柱	前田土器・青花磁	平安時代～9世紀代	下正	
SII-2	I 区	溝	2.36	1.68	0.49	—	SD1に切られる	自然堆疊	良賀家紋・片葉・青花磁	平安時代	下正	
SII-3	I 区	溝	0.84	0.2	0.037	—	SD1に切られる	自然堆疊	上野御所瓦	古墳時代	下正	
SII-4	I 区	溝	0.72	0.24	0.087	—	SD1に切られる	自然堆疊	鹿島瓦	平安時代	下正	
SII-5	II 区	盛穴構造	2.5	0.64	0.24	馬鹿	—	鹿島瓦	伊勢原・B	平安時代	下正	馬鹿は江戸初期
SII-6	II 区	溝	0.95	1.26	0.252	—	SD1に切られる	自然堆疊	伊勢原・大根原瓦	平安時代	下正	28と3の魔の山に馬鹿
SII-7	II 区	土壘	0.78	0.31	0.035	刀剣	SD1に切られる	自然堆疊	十針瓦	平安時代	下正	坂山の土壘
SII-8	III 区	溝	2.62	2.28	0.5	—	SD1に切られる	自然堆疊	伊勢原・上野道瓦	平安時代	下正	江戸時代
SII-9	III 区	溝	2.6	1.16	0.57	—	SD1に切れる	自然堆疊	伊勢原・日向瓦	平安時代	下正	馬鹿は江戸時代
SII-10	III 区	溝	5.38	3.98	0.82	—	—	自然堆疊	淡路原・A、B	平安時代	下正	馬鹿は江戸時代

表 6 平成17年度調査遺構調査表

IV 自然科学分析

1. 黒崎種田遺跡出土遺物のC14放射性年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. 試料

試料は、土坑（サンプル1 SK83 最下層）と溝（サンプル2 SD06 4層）より採取された上塙2点である。分析試料として、これらの中から含まれる大形植物化石や炭化物等の有無の観察を行い、それぞれの試料より炭化物片の抽出を行った。

・サンプル1 灰褐色を呈するシルト質土であり、微細な炭化物や塗膜状の細片が含まれる。分析試料として炭化物（0.22g）を抽出した。なお、細片は、肉眼及び実体鏡観察では織物状を呈する様子が認められる。

・サンプル2 中～粗粒砂からなる偽鍾を含む青灰色を呈する極細粒砂質土であり、微細な炭化物片が比較的多く含まれる。分析試料として炭化物（0.21g）を抽出した。なお、サンプル2は、試料の一部を分割し、双眼実体鏡顕微鏡及び電子顕微鏡による観察を行い、その由来を調査する。

2. 分析方法

測定はAMS法を用いている。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用し、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma; 68%）に相当する年代である。暦年校正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

3. 結果

表1. 放射性炭素年代測定結果

試料名	種類	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
サンプル1 SK83 最下層	炭化物(土壤より抽出)	900 ± 30	-27.33 ± 0.77	940 ± 30	IAAA-50824
サンプル2 SD06 4層	炭化物(土壤より抽出)	1,090 ± 30	-11.30 ± 0.75	860 ± 30	IAAA-50825

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3)付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

同位体効果による補正を行った測定結果を表1に示す。本分析の結果、サンプル1は900 ± 30、サンプル2は1,090 ± 30を示した。なお、暦年校正は、本来10年単位での表記が通常とされるが、将来的に予想される暦年校正プログラムの改訂や再検討に対応するため、本報告では1年単位で表記している。また、測定誤差については σ 、 2σ の値を示した。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。測定誤差を σ とした場合の暦年校正結果は、サンプル1はcalAD1,047-1,205、サンプル2はcalAD898-992である。

表2. 暦年校正結果

試料名	補正年代 (BP)	暦年校正年代(cal)						相対比	Code No.
		σ	cal AD 1,047	- cal AD 1,089	cal BP 903	- 861	0.446		
サンプル1 SK83 最下層	988 ± 31	cal AD 1,122	- cal AD 1,139	cal BP 828	- 811	0.160	IAAA-50824	IAAA-50824	
		cal AD 1,149	- cal AD 1,186	cal BP 801	- 764	0.358			
		cal AD 1,201	- cal AD 1,205	cal BP 749	- 745	0.036			
		2 σ	cal AD 1,040	- cal AD 1,111	cal BP 910	- 839	0.433		
サンプル2 SD06 4層	1,086 ± 33	cal AD 1,115	- cal AD 1,121	cal BP 835	- 738	0.567	IAAA-50825	IAAA-50825	
		cal AD 1,046	- cal AD 1,066	cal BP 1,052	- 1,029	0.325			
		2 σ	cal AD 894	- cal AD 1,016	cal BP 1,056	- 934	1.000		

1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用
2)計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3)折日を丸めるのが慣例だが、暦年校正プログラムが改訂された場合の内計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めている。

4)統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である

5)相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

2. 黒崎種田遺跡出土遺物の樹種識別

富山県林業技術センター 長谷川 益夫

1. 供試試料

平成16年度 黒崎種田遺跡発掘調査 SD 6 8 出土 羽子板状木製品

2. 試験方法

1)セロイジン樹脂包埋

アルコール脱水→アルコールエーテル置換→セロイジン樹脂包埋

2)光学顕微鏡による観察と顕微鏡像の撮影

3)④日本木材加工技術協会刊「日本の木材」等を参考に識別

3. 試験結果

スギ *Cryptomeria japonica* D. Don (スギ科 Taxodiaceae)

試料の観察特徴

1)針葉樹、晩材幅は年輪幅のおよそ15~25%である。(写真2)

2)樹脂細胞が晩材及び早材部に短接線状あるいは散らばって分布する。

(写真3)

3)放射組織は単列、細胞高は2~22細胞で10細胞以下が主である。

4)仮導管板目壁に小型の有縁壁孔対が散見される。(写真3)

5)仮導管板目壁には大型の有縁壁孔対が1列(末端部で場所によって2列)認められる。(写真4~5)

6)分野壁孔はスギ型で、分布密度は一分野あたり2個である。(写真4)

7)インデンチャーが認められる。(写真4)

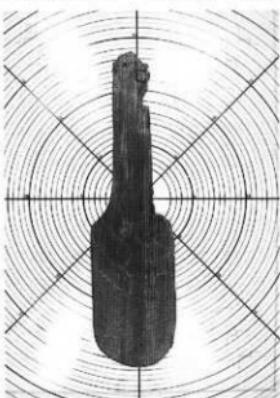


写真1 供試資料

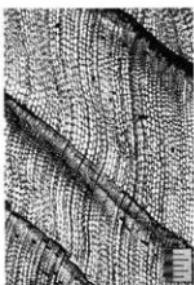


写真2 木口切片(晩材幅など:撮影倍率10×)

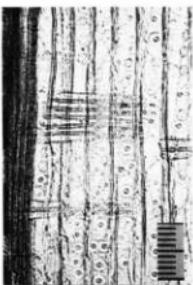


写真4 徵目切片(分野壁孔など:撮影倍率50×)

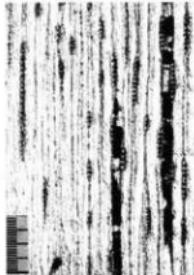


写真3 板目切片(樹脂細胞など:撮影倍率25×)

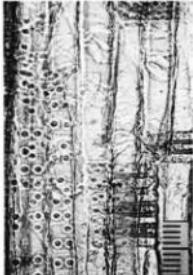


写真5 徵目切片(インデンチャーなど:撮影倍率50×)

3. 黒崎種田遺跡出土の種実遺体

中村 亮仁

1. 試料と方法

分析試料は、平成17年度黒崎種田遺跡発掘調査において、第1区SD1の覆土中より採取されたものである。溝の埋穀時期は出土遺物などから9世紀と推定されている。試料は水漬けの状態で試料瓶に保存されていた。同定は肉眼及びルーペで観察し、現生標本との対比を行った。

2. 同定結果

同定の結果、モモと同定された。以下に同定根拠となった特徴を記載し、写真に示す。

—記載—

モモ (*Prunus persica* Batsch) 核

核は茶褐色で、先端がとがる卵型を呈する。側面に縫合線が巡り、表面には特有の隆起がみられる。隆起の表面には小孔が散在する。長さ28.7mm、幅19.9mm、厚さ13.8mmである。

3. 所見

モモは大陸から伝播された栽培植物で、最古のモモ核の報告は長崎県伊木力遺跡の縄文時代前期のものとされている。出土報告例が多くなるのは弥生時代以降であり、県内のモモ核についても弥生時代後期の江上A遺跡などで出土している。古代の遺跡の出土例では中名I遺跡などが報告されている。

モモ核の研究は小清水の研究(註1)が先駆的であり、遺跡から出土するモモ核の大きさに注目し、時代が下がるにつれて品種改良がおこなわれ、大型化するというものであった。その後、モモ核の出土報告が増加するにつれて南木(註2)は、弥生時代にも大きなものが存在することや、中・近世に至っても小型のものが出土することから、小清水の指摘しているような時代が下がるにつれて大型化するというような単純な図式にはならないという指摘がなされた。一方、金原(註3)は形態による分類を行い、AからFまでの大きく6つに分類している。さらに、これらの各タイプが時代によって出現・存在することを示唆している。今回出土したモモ核は全体に細長く非対称的で表面には小孔が散在するタイプであり、金原の分類を準用するならばE類に相当すると考えられる。

註1：小清水卓二(1963)「古代日本の住居跡から出土する桃について」『近畿古文化論考』吉川弘文館

註2：南木睦彦(1991)「栽培植物」『古墳時代の研究』吉川弘文館

註3：金原正明(1996)「古代モモの形態と品種」『考古学ジャーナルNo.409』ニュー・サイエンス社

参考文献

粉川昭平・吉井亮一(1984)「江上遺跡群出土の植物遺体」

『北陸自動車道遺跡報告－上市町木製品・総括編－』富山県教育委員会
財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所(2003)『中名I・V遺跡発掘調査報告』



V 総括

平成16、17年度と2ヵ年にわたって黒崎種田遺跡の調査を行った。調査面積は狭小であったが、この周辺の奈良・平安時代、および中近世期の状況が若干ではあったが垣間見る事が出来た。紙面の関係もあるため、簡単ではあるが時代別に周辺遺跡と本遺跡の対比を行い、総括としたい。

奈良・平安時代（平成17年度調査）

調査は105m²と非常に狭い範囲であったが、堅穴建物1棟や大溝などを検出し、本遺跡の奈良・平安時代の集落の状況を若干見ることができた。集落の営まれた時期は8世紀後半以降と9世紀後半～10世紀初頭頃のものである。この周辺で当該時期の遺跡としては、任海宮田遺跡、富山県総合運動公園遺跡群など多くの遺跡が挙げられる。これはこの周辺の集落の展開が、8世紀以降から小規模ながらも建物群を形成し、集落の最盛期である9世紀後半から10世紀前半まで、集落が継続傾向にあると云う類似点が認められるためである。

遺物は任海宮田遺跡などで、多種多様な墨書き器や奈良三彩、帶金具、さらに東渡や尾北などで生産されたと考えられる多量な灰釉陶器など、富山県下でも特異な遺物が出土している。さらに富山県運動公園遺跡群内の吉倉B遺跡や、先にも述べた任海宮田遺跡などにおいて9世紀後半の墨書き器に「城長」の文字が多く見られるのも、この周辺の集落の性格を述べる一つの鍵となるものである。

黒崎種田遺跡の遺構は、8世紀後半の大溝や堅穴建物、さらに9世紀後半～10世紀初頭の大溝など、周辺遺跡の存続時期と符号するものであり、上記の遺跡の状況と同様な動きが存在する可能性を看取できる結果であった。

（新宅）

中世（平成16年度調査）

調査は670m²の範囲で実施され、堅穴状土坑1基、掘立柱建物2棟、井戸1基、溝などの遺構が検出された。遺跡の所属時期は主として12世紀後半から13世紀とみられる。調査区の西側ではこれら中世の遺跡が集中するが、東側では6世紀の遺物を含む溝1条が検出されており、調査区の東西両端で遺構に時期的な差がみられる。

本遺跡周辺における中世の集落遺跡としては友杉遺跡や任海宮田遺跡、富山県総合運動公園遺跡群などがみられる。これらの遺跡からは、堅穴状土坑が多数検出されており、本遺跡の遺構分布と類似する点がみられた。遺構の所属時期についても12世紀から13世紀を主体としており、本遺跡の存続時期と一致するものとなっている。

堅穴状土坑は、工房や炊事場、または土間や倉庫などの性格を持つとされている。床面に焼土を作り場合は工房や炊事場にあたるとされるが、本遺跡の土坑内では焼土は確認されていない。このことから堅穴状遺構は土間など火を作らない作業空間か倉庫的性格であると思われる。

また、本遺跡の出土品には、青磁の盤や梅瓶、多数の灯明皿など、一般庶民とは異なる特定階層にかかる遺物がみられる。近隣に位置する鰐川館跡や上新保遺跡においても同様の性格を持つ遺物が出土しており、これらの遺跡との関連性もうかがえる。

本遺跡では周辺遺跡と性格を同じくする好資料が検出されているが、遺構の分布状況から集落の中心は調査区の西側に外にあるとみられる。近接する遺跡も含め、今後の調査により遺跡の全容が解明されることを期待しつつ、今回のまとめとしたい。

（高野）

引用・参考文献

- 穴水町教育委員会 1987『西川島一能登における中世村落の調査』
- 池野 正男 1987『射水丘陵における8世紀後半の須恵器窯跡』『大境11号』
- 内田並紀子 1997『越中における古代土師器の編年予察』『埋蔵文化財調査概要--平成8年度』
- (財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 内田並紀子 2001『任海宮田遺跡出土灰釉陶器』『富山考古学研究 第4号』
- (財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 河西 健二 1993『越中における様相 3.堅穴状土坑』『中世北陸の家・屋敷・暮らしぶり』 北陸中世土器研究会
- 小杉町教育委員会 2003『赤田I遺跡発掘調査報告』
- 小杉町教育委員会 2005『赤田I遺跡発掘調査概要(1)』
- 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2005『吉倉B遺跡発掘調査報告』
- 中野山紀子 2002『任海宮田遺跡の巻書土器について 平成13年度調査出土資料の紹介』『富山考古学研究 第4号』
- (財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 細辻 真澄 2001『任海宮田遺跡出土の上鍍について』『富山考古学研究 第4号』
- (財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 堀沢 祐一 1998『任海宮田遺跡をめぐる諸問題』『富山史壇』
- 一島 道子 2001『黒河尺目遺跡の堅穴状土坑について』『富山考古学研究 第4号』
- (財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 森 隆 1998『任海遺跡群の古代建物群構成』『富山考古学研究 別刊号』
- (財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 森 隆 1999『任海遺跡群の古代建物群構成(2)』『富山考古学研究 第2号』
- (財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 森 隆 2001『富山県出土の土鍍集成』『富山考古学研究 第4号』
- (財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 森田 利枝 2003『任海宮田遺跡出土の墨青土器 半成14年度出土資料の紹介』『富山考古学研究 第6号』
- (財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 武田健次郎 2001『任海宮田遺跡の大型建物について』『富山考古学研究 第4号』
- (財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 武田健次郎 2003『狭義の富山平野における扇状地立地型集落の様相』『富山考古学研究 第6号』
- (財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 武田健次郎 2004『富山平野における古代基礎地域の再考』『富山考古学研究 第7号』
- (財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 富山県埋蔵文化財センター 1990『栗山猪原遺跡 南中田A遺跡 任海鎌倉遺跡 南中田C遺跡』
- 富山県埋蔵文化財センター 1991『南中田D遺跡発掘調査報告書』
- 富山県埋蔵文化財センター 1993『富山県総合運動公園内遺跡発掘調査報告(3)』
- 富山県埋蔵文化財センター 1994『富山県総合運動公園内遺跡発掘調査報告(4)』
- 富山県埋蔵文化財センター 1996『富山県富山市任海宮田遺跡発掘調査報告書』
- 富山県埋蔵文化財センター 1997『富山県富山市任海宮田遺跡発掘調査報告書II』
- 富山県埋蔵文化財センター 1998『富山県富山市任海宮田遺跡発掘調査報告書III』
- 富山市教育委員会 1997『富山市内遺跡発掘調査概要I』
- 富山市教育委員会 1998『上野井田遺跡』
- 富山市教育委員会 2004『富山市打出遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2000『富山市上新保遺跡発掘調査報告』
- 四柳嘉章 「木製品に見る中世の民間信仰」『飾る・造ぶ・祈るの木製用具』1996 北陸中世土器研究会
- 吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』古川弘文館



平成16年度 調査区全景（東から）



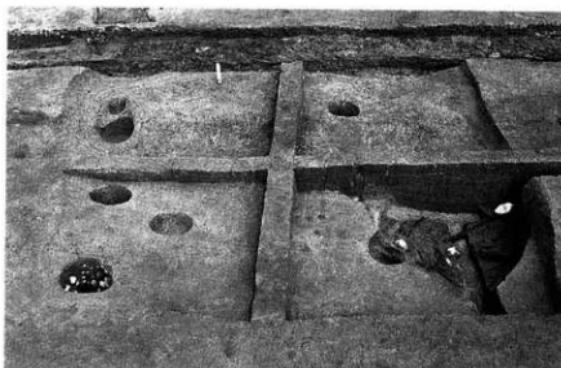
平成17年度 調査区全景（西から）



SK83（東から）



SK83（南から）



SK83土層断面（南から）



SK83周辺小ピット群
(南西から)



SD68及びSB95
(北西から)



SD68及びSB99
(南東から)



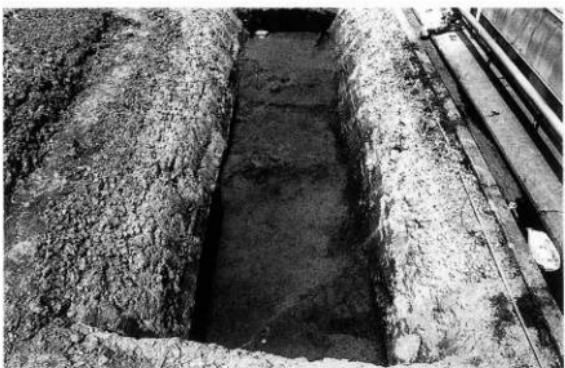
SD68土層断面（北から）



SE69完掘（北から）



SD79・SD80（南から）



1区全景（東から）



2区全景（北から）



3区全景（西から）



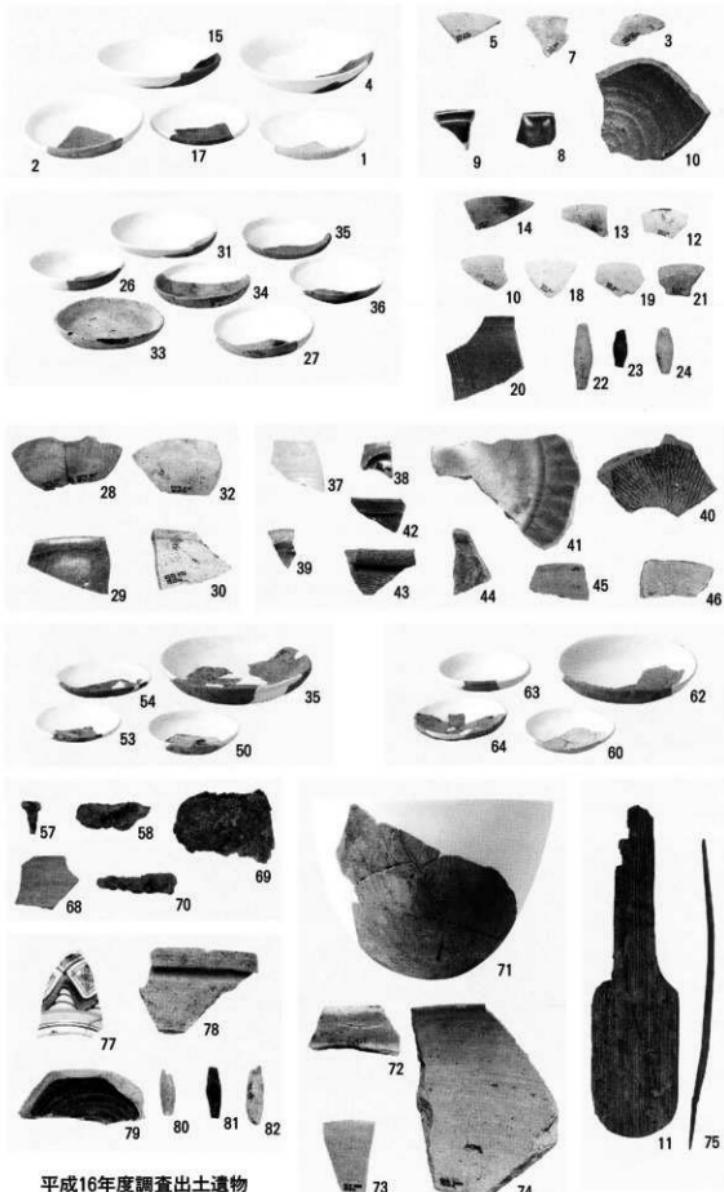
SI 1 完堀（北から）



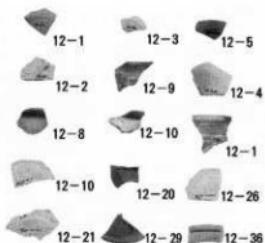
SI 1 カマド（北から）



SD 6 完堀（東から）



平成16年度調査出土遺物



12-6



13-38



13-37



12-32



12-33



12-16



12-18



13-40



13-43



12-13



13-45

平成17年度出土遺物

報告書抄録

ふりがな	とやましくろさきたねだいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	富山市黒崎種田遺跡発掘調査報告書							
副書名	民間駐車場建設及び工場増築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
卷次								
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	2							
編著者名	高野裕二 新宅輝久 中本八龍							
編集機関	株式会社中部日本鉱業研究所							
所在地	〒933-0824 高岡市西藤平藏581							
発行機関	富山市教育委員会(埋蔵文化財センター)							
所在地	〒933-0083 富山県富山市下新木町5番12号 TEL.076-442-4246							
発行年月日	西暦2005年11月20日							
所収遺跡名	ふりがな 所在名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
黒崎種田遺跡	富山市黒崎	162019-201480		36度	137度	20050127 ~20050318	670	駐車場建設
					39分	12分	20050614 ~20050624	105
黒崎種田遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
黒崎種田遺跡	集落跡	鎌倉・室町 奈良・平安	竪穴状土坑・掘立柱建物・溝・井戸等	中世土師器、青磁、白磁、珠洲、土鍤、木製品、鐵滓				
			溝・竪穴建物・土坑	須恵器、上師器、木製品(下駄・箸状木製品・漆椀)				
要約	<p>黒崎種田遺跡は熊野川と土川に挟まれた微高地高地上に位置する。平成16年度調査では、中世の竪穴状土坑や掘立柱建物、溝、井戸等が検出された。住居は確認されておらず、非居住性の強い遺構が主であることから工房等を主体とした生産域であった可能性が高い。出土遺物は中世土師器の灯明皿や青磁の碗・盤、青白磁の梅瓶など、一般庶民とは異なる特定階層の生活にかかわるものが多く見られ、近隣に立地する蛇川館跡や上新保遺跡との関連性も推定される。所属時期は12世紀～13世紀である。</p> <p>平成17年度調査では奈良・平安時代の竪穴建物1棟や溝・人溝などが検出された。各遺構の所属時期は、溝や竪穴建物が8世紀、大溝が9世紀後半～10世紀初頭とみられる。南中田D遺跡や任海宮田遺跡など周辺遺跡の存続時期とも符合しており、規模ながら同時期の集落の様相を示す結果が得られた。</p>							

富山市埋蔵文化財調査報告2

黒崎種田遺跡発掘調査報告書

—駐車場建設及び工場増築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

2005(平成17)年11月20日発行

発 行 富山市教育委員会(埋蔵文化財センター)

〒930-0803 富山市下新町5番12号

TEL 076-442-4246 FAX 076-442-5810

E-mail: maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp

編 築 株式会社中部日本鉱業研究所

〒933-0824 高岡市西藤平蔵581番

TEL 0766-63-8850 FAX 0766-63-8852

印 刷 株式会社富山フォーム印刷

